

中近世社殿遺構における『匠明』等木割書内容との比較研究

ー山梨市の神社建築を中心としてー

K99005 石田 篤



1. はじめに

1-1 研究の目的

江戸時代初期の『匠明』に代表される木割書とは、大工が木割を秘伝として継承し自らの権限継承の裏付けになるように作られたものであるが、木割と呼ばれるものは既に中世に発生しており、13世紀中頃から16世紀以降にかけて各地の工匠達により独自に確立されていった。

甲斐国（現在の山梨県）は、15・16世紀に同国の守護であった武田氏により大規模な寺社造営が行われた地域である。また、武田氏滅亡後、江戸幕府の統轄下にあった近世の山梨には、甲府町方大工の他、下山大工や諏訪立川流などの大工集団が存在していた。この山梨県に中近世建築の残存例が多い理由の一つとして、こうした大工集団の活躍が挙げられる。しかし、中世および近世に同地域に建てられた神社建築は現存しているものの、当時の設計者の意図をあらわす史料が少なく、その設計手法は未だ明らかにされていない。

そこで本研究は、現存する神社建築の実測調査に基づく各部寸法の木割を把握し、『匠明』社記集や他の大工集団による木割・雛形の分析結果をふまえて、その木割の変遷を明らかにすることを研究の目的とする。

1-2 研究の方法

- 1) 山梨県山梨市の中世後期から近世に建てられた神社建築10棟の実測調査を行う。
- 2) 調査した神社建築の図面を作成し、構造・意匠形式を把握するための寺社シートと、実測した各部寸法を整理した木割シートを作成する。
- 3) 当研究室西田陽子さんの卒業研究より『匠明』社記集および江戸建仁寺流木割の分析結果を把握する。
- 4) これらの実測結果・関連資料をもとに中世後期から近世を通じての木割の変遷を追うと共に、上記3)との比較を行う。

2. 山梨市の社寺建築

2-1 甲斐武田氏の中世建築

甲斐武田氏は、16世紀の信虎・晴信（信玄）の代で最盛期を迎え、同家による寺社の造営活動が天文期（1532～1554）を中心に盛んに行われている。建立された建物には、現在、重要文化財に指定されているものが多く、中世後期の社寺建築の姿と、清和源氏の流れを受け継ぐ甲斐源氏武田氏の威厳をいまに伝えている。

本研究では、重要文化財八幡神社末社武内大神本殿（一間社流造）を選び実測の対象とした。

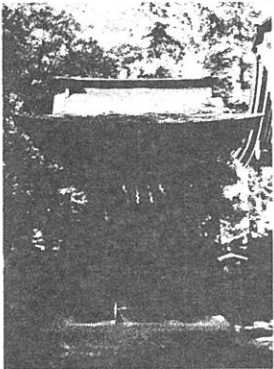


写真1 武内大神本殿外観

2-2 山梨市の社寺建築実測調査

2002年7月および11月に実測調査を行った神社本殿10棟a～jを表1に示す。なお、aが武田家造営の中世社殿で、その他が近世以降の社殿である。

表1

	建築様式	建立年
a. 武内大神本殿	一間社流造	1500
b. 大井俣水ノ宮神社本殿	二間社流造	江戸初期
c. 神部神社本殿	一間社流造	江戸初期
d. 白山建岡神社本殿	一間社流造	1677
e. 歌田金櫻神社本殿	一間社破風付入母屋造	1790
f. 水上神社本殿	一間社流造	1859
g. 白山神社本殿	三間社流造	1862
h. 大宮五所大神本殿	三間社流造	不明
i. 万力金櫻神社本殿	一間社流造	不明
j. 七日子神社本殿	一間社流造	1915

実測した神社本殿10棟の図面と寺社シートを作成する。神社本殿h・i・jの3棟の木割については、建立年数が不明、もしくは近代であるため本研究の分析対象から除外し、建立年代の特定できる神社本殿7棟a～gを対象に、各神社の木割について、その実測値に基づく各部寸法の枝割換算を行い、木割シートを作成する。

ここでは江戸時代初期に建立されたb. 大井俣水ノ宮神社本殿を例に示す。

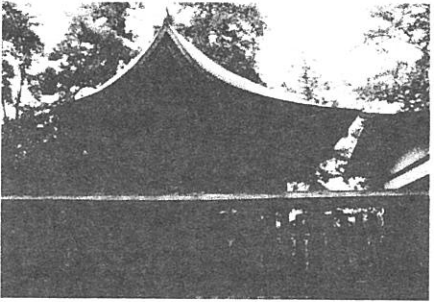


写真2 大井俣水ノ宮神社本殿外観

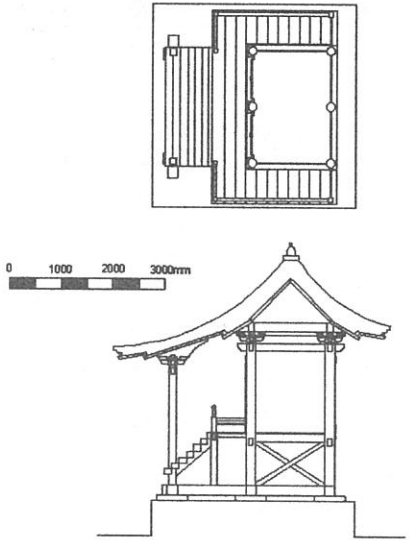


図1 大井俣水ノ宮神社本殿一平面図・断面図

3. 実測調査結果と木割文書

3-1 『匠明』・江戸建仁寺流『建仁寺派家伝書』との比較

表3に、実測した神社本殿a～gについて枝割換算を行った木割と『匠明』社記集一間社流造（1608）、江戸建仁寺流『建仁寺派家伝書』（1677～1710）神社一間社之事・匠用小割の木割との比較を示している。

山梨市の神社建築における中世後期から近世にかけての木割の変遷を追うにあたり、神社a～gの各部材のうち特に柱、斗拱、垂木に注目して分析する。また、江戸時代初期に成立した『匠明』と江戸時代中期に作られた『建仁寺派家伝書』を時代的な位置づけとして捉える。

表2 大井俣水ノ宮神社本殿一寺社シート

建築名		大井俣水ノ宮神社本殿
所在地		山梨市小原西 1226 番地
建立年代		江戸時代初期
棟札等資料		不明
大工		不明
基本構造	桁行×梁間 屋根形式 ・材料 向拝 破風	2間×1間 二間社流造 銅板葺（現状） 有 無
基礎基礎	葛石 礎石 向拝礎石 亀腹	自然石（後年の修理） 有（自然石） 有（自然石） 無
軸部	柱形状	円柱
	長押	蟻内法 腰切目地 有 無 有 無
	貫	頭飛内法 腰地 有 無 不明 有 無
	木鼻	禪宗様（蟬影）
組物	種類 尾垂木 通肘木 木鼻 突肘木 支輪	平三斗 連三斗 無 有 禪宗様（蟬影） 無 無
中備	外廻り 内廻り	無 不明
軒		二軒繁垂木 打越した先に飛檐垂木
妻飾		虹梁大瓶束（上に挿し肘木） 棟木と桁隠に猪目懸魚
縁高欄		切目縁（後年の補修） 擬宝珠高欄（登り無）
向拝	柱 組物 中備 垂木（軒） 繁虹梁 手挟	角柱 連三斗 平三斗 一軒（打越の先） 無 有
床		不明
天井		不明

表3 神社 a~g の木割シート (実測値) と『匠明』・『建仁寺派家伝書』との比較 (単位: 枝)

	『匠明』 (1608)	江戸建仁寺流 『建仁寺派家伝書』 (1710)	a. 武内大神 本殿 (1500) 一間社流造	b. 大井俣水ノ 宮神社本殿 (江戸初期) 二間社流造	c. 神部神社 本殿 (江戸初期) 一間社流造
表間	22	20	18	24	20
柱太さ	2.2	2.0	1.682	1.978	1.985
柱太さ/表間	0.1	0.1	0.093	0.082	0.099
内法長押高さ	13.2	12.0	13.692	13.022	15.147
内法長押成	1.32	1.2	1.402	1.451	1.618
内法長押の柱からの出	0.44	0.4	0.514	0.538	—
頭貫成	1.54	1.2	1.383	1.571	1.735
頭貫幅	0.66	—	0.822	0.813	1.147
浜縁高さ	5.5	4.32	ナシ	ナシ	5.588
向拝柱太さ	1.76	1.6	1.430	1.495	1.618
向拝柱太さ/柱太さ	0.8	0.8	0.850	0.756	0.815
浜縁上より浜床上まで	2.816	—	ナシ	ナシ	3.824
階段	7段	5段	9段	6段	7段
大床高さ	16.5	12.12	16.822	21.670	16.029
切目長押成	1.32	0.8	1.393	1.835	1.618
大斗幅	2.2	2.0	2.056	2.000	2.059
大斗縁成	0.528	0.44	0.467	0.527	0.441
大斗成	1.32	1.1	1.168	1.209	1.250
大斗斗尻	1.32	1.2	1.402	1.209	1.324
大斗成/大斗幅	0.6	0.55	0.568	0.605	0.607
大斗縁成/大斗成	0.4	0.4	0.400	0.436	0.353
大斗斗尻/大斗幅	0.6	0.6	0.682	0.605	0.643
肘木幅	0.733	0.666	0.654	0.648	0.706
肘木成	0.88	0.8	0.748	0.857	0.853
肘木幅/柱太さ	0.333	0.333	0.389	0.328	0.356
肘木成/肘木幅	1.2	1.2	1.144	1.323	1.208
巻斗長さ	1.44	1.28	1.411	1.418	1.441
巻斗斗尻	0.864	0.768	0.981	0.857	—
巻斗縁成	0.352	0.3072	0.374	0.319	0.324
巻斗成	0.88	0.768	0.888	0.802	0.838
巻斗縁成/巻斗成	0.4	0.4	0.421	0.398	0.387
巻斗斗尻/巻斗長さ	0.6	0.6	0.695	0.604	—
巻斗木口肘木よりの出	0.244	0.3066	0.374	0.253	0.412
突肘木端長さ	1	1.28	0.841	1.758	0.735
丸桁成	1.32	1.2	1.168	2.033	1.956
丸桁幅	垂木1+木間1	0.9	0.935	1.231	1.250
地垂木幅	0.44	0.4	0.402	0.396	0.441
地垂木成	0.528	0.48	0.514	0.703	0.588
地垂木端部成	0.484	—	0.542	0.681	0.515
地垂木幅+1枝	1.44	—	1.402	1.396	1.441
地垂木勾配	4寸勾配	5寸勾配	3.84寸勾配	5.77寸勾配	2.68寸勾配
飛檐垂木幅	—	0.4	—	—	0.441
飛檐垂木成	0.484	0.48	0.654	0.527	0.559
飛檐垂木端部成	0.4752	—	0.467	0.363	0.441
飛檐垂木勾配	2.3寸勾配	—	3.64寸勾配	—	—
大軒長さ	7	6	—	5.990	5.147
小軒長さ	5	5	3.738	5.440	—
飛檐垂木端部幅	0.396	—	0.327	—	0.294
茅負下端幅	0.66	0.8	—	0.824	1.103
茅負成	0.88	1.0	0.981	0.451	1.029
木負下端幅	0.66	0.8	—	0.714	1.029
木負成	0.88	—	0.701	0.956	1.000

d. 建岡神社 本殿 (1677) 一間社流造	e. 歌田金櫻 神社本殿 (1790) 一間社入母屋造	f. 水上神社 本殿 (1859) 一間社流造	g. 白山神社 本殿 (1862) 三間社流造
18	22	20	39
1.816	2.309	2.633	2.260
0.101	0.105	0.132	—
13.827	17.705	11.667	18.288
1.031	1.638	1.783	1.849
0.286	0.242	0.583	0.274
1.388	2.389	2.000	1.918
0.673	1.342	1.250	0.959
ナシ	9.799	13.383	8.904
1.388	1.960	2.000	2.055
0.764	0.849	0.760	0.909
ナシ	3.221	4.383	4.384
8段	6段	6段	6段
18.592	22.819	24.800	22.466
1.143	2.013	1.467	1.137
1.776	2.215	2.483	2.466
0.337	0.577	0.600	0.534
0.980	1.450	1.500	1.301
1.296	1.544	1.500	1.507
0.552	0.655	0.604	0.528
0.344	0.398	0.400	0.410
0.730	0.697	0.604	0.611
0.612	0.805	0.800	0.795
0.745	0.899	1.000	0.904
0.337	0.349	0.304	0.352
1.217	1.117	1.250	1.137
1.378	1.477	1.517	1.507
0.918	0.832	—	0.890
0.276	0.456	0.383	0.329
0.765	0.966	0.900	0.822
0.361	0.472	0.426	0.400
0.666	0.563	—	0.591
0.133	0.349	0.250	—
0.939	1.772	1.467	1.575
1.245	1.946	0.433	2.356
0.867	1.342	1.483	1.301
0.296	0.483	0.500	0.479
0.408	0.604	0.600	0.548
—	0.604	—	0.548
1.296	1.483	1.500	1.479
3.64寸勾配	—	3.84寸勾配	4.66寸勾配
0.306	—	0.500	0.479
0.388	—	0.583	0.548
—	—	0.533	0.548
—	—	2.13寸勾配	3.64寸勾配
—	—	18.750	6.164
—	—	4.783	5.342
—	—	0.417	—
0.704	—	1.150	0.904
0.918	0.993	1.050	1.027
0.684	0.966	1.117	0.890
0.827	1.007	1.167	1.014

3-2 実測値があらわす木割の特徴

『匠明』に代表される木割書とは、設計理念を示したものであり、同時代の現存遺構と比較すると、重要な事実が指摘できる。即ち、中世後期のa、近世初期のb、cと比べると『匠明』の木割は、柱幅、大斗、肘木の大きさについてかなり太くなっており、中世末から近世初期の社殿建築の木割とは著しく異なる姿を呈示している。

次に、現存遺構の木割をみていくと、以下の点が指摘できる。

- ① 柱の太さ、大斗幅、肘木幅、巻斗長さをみると、中世後期の社殿であるa、武内大神本殿は、b以降の近世のものとは比べると木細であるのに対し、近世のb~gを時代順にみていくと、江戸初期から前期にかけて(b~d)は大きな変化はみられないものの、江戸後期から末期にかけて(e~g)木割は太くなっており、『匠明』に近い木割がこの時期に現れている。
- ② 大斗、肘木、巻斗の各材における比例関係をみると、a~g共に木割書の比例関係に近いが、同じである。
- ③ 地垂木の幅に一枝を足した値と巻斗長さを比べると、a~g共にほぼ同じか、同値を示しており、六枝掛が中世遺構より徹底されているということが分かる。

4. 結論

前述の分析により、明確なのは江戸時代後期・末期に木割が特に太くなっているということである。また、神社e、f、gは、意匠においても部材の彫刻化が著しく、18・19世紀の社寺建築の特徴をよく表している。一方、このような全体の視覚的な変化はあっても、大斗、肘木、巻斗の各材における比例関係の時代的な変化は小さい。さらに、江戸時代初期に成立した『匠明』に近い木割が、江戸時代後期になって初めてこの地域に出現したということがいえる。

(参考文献)
伊藤要太郎著『匠明』鹿島出版会・1992年
河田克博著『近世建築書—堂宮雛形2建仁寺流』大龍堂書店・1988年
『重要文化財産八幡神社修理工事報告書』1957年
『山梨県史・文化財編』山梨県・1999年
磯貝正義編『山梨県の歴史』河出書房新社・1990年

- ※1 表3の値のうち実測不可能もしくは不正確・不明確なものは(一)で表記している。
※2 江戸建仁寺流『建仁寺派家伝書』について、木割の解釈が複数あるものはその両者を示す。

指導教員 伊藤洋子教授